

■詳細

地域	民話名
あらすじ	
岩手県普代村	お夏と藤平
<あらすじ> 江戸時代、全国各地の諸藩が幕府に納めるお米は船で運ばれていた。江戸中期になると河村瑞賢（ずいけん）が廻船航路を開き、それより、日本の海上交通網は飛躍的に発達した。その要となった年、1670 年頃のこと。太平洋を航行する東廻りの船に、藤平（とうへい）という若者が船乗りとして乗りこんだ。ところが、その船は南部沖で難破してしまふ。流れの速い黒潮と北から流れてくる冷たい親潮がぶつかる海域をうまく乗り越えられなかったのだ。藤平は普代村に流れ着き、怪我が回復するまでのあいだ村長の家で過ごすことになった。この家の娘、お夏は心優しく、美しい娘だった。お夏の献身的な介抱により、藤平は元気になった。やがて、迎えの船がきて、藤平は江戸へ帰って行った。その後も、藤平はお夏のことが忘れられず、また会いたいと思い、船に乗ることにした。藤平は船が三陸の港に着くと、必ずお夏に会いに行った。やがてお夏も藤平を待つようになった。二人は将来を約束する仲になった。だが次の年になると、藤平の乗る船は、日本海を通る西廻りで航海するようになってしまった。これでは、お夏の元へ行くことができない。藤平の希望で船は動かない。船の行くところに身を任せるしかない。まして、陸路は関を通れず、会いに行くことはできない。お夏はそうした藤平の事情を知らず、いつまでも松のあるところから沖を見つめて、藤平が来るのを待ち続けた。お夏が藤平を待っていた松を、ひとは藤平松と呼ぶようになった。数年が経った後、藤平はようやく東廻りの船に乗ることができ、普代村を訪れた。しかし、もう村にお夏はいなかった。お夏は内陸の遠い村へ、お嫁に行ったのだという	
神奈川県藤沢市	五頭龍と弁天様
<あらすじ> 太古のむかし、相模国鎌倉の深沢という所にごこまでも続く広い湖があった。ここに五つの頭を持つ恐ろしい五頭龍（ごずりゅう）が住んでいて、人々を苦しめていた。五頭龍は山崩れや洪水を起こして田畑を押し流し、村を破壊し、時には火の雨を降らせる事もあった、ついに五頭龍は人を喰うようになった。村の長者には十六人の子がいたが一人残らず五頭龍に吞まれてしまい、そうして村人は皆この村を出てよそに移り住んでいった。（義経で有名な「腰越状」で知られるこのあたりの地名である「腰越」は、この伝説による「子死越」が元になっている） そうした時、天地を揺るがす大変な事が起こった。 欽明天皇十三年（西暦 5 5 2 年）四月十二日のことである。黒雲が天をおおい、深い霧が立ち込め大地が振動すること十日間、二十三日にやっと治まったところ、十五童子を従えた天女が姿を現した。 諸天諸神は岩を落とし、海底より砂を巻き上げ、天女が降りるべき島を作り上げた。この島が江の島である。 美しい天女が紫の雲に乗り、この島に降り立つ様子を見ていた五頭龍は、その麗しさにただただ見惚れるばかりで心を奪われた。 海を渡り島に赴いた五頭龍は天女を我が妻に迎えたいと申し出る。 しかし、五頭龍の悪行の数々を天界から見下ろしていた天女は五頭龍を非難し、その求婚をはねのける。一旦は引き下がった五頭龍は再び天女の許を訪れ、これまでの自らの無慈悲さを悔い改める事を誓う。天女は五頭龍の固い心信じ、静かに手を差し伸べ互いに夫婦神となるのであった。 それからの五頭龍は、日曜りの折には雨を降らせ、稔りの秋には台風をはねのけ、津波が押し寄せたときには体をぶつけ押し返した。 その度に五頭龍の体は衰えていき、自らの命が終わる事を悟ったある日、五頭龍は山となり村を見守ることを約束し、対岸に横たわった。 体は江の島を守る形で山となり、やがて龍口山と呼ばれるようになった。 村人はこの山に五頭龍を鎮める社を建て、手厚く祀った。今も五頭龍は龍口明神として腰越に、天女は江の島の弁財天として祀られ、六十年に一度の式年大祭のときには、五頭龍の御神体が江の島に渡り、弁財天と並んで鎮座する。	
新潟県糸魚川市	サザエと弁天岩の女神さま
<あらすじ> 能生町には昔から小泊という村があった。ここは半農半漁の漁村で「磯獵は地付根付次第なり、沖は入会」という約束に従い、村で海を守りながら、畑仕事の合間に漁を営んでいた。 冬はいつも波が荒く、太助どんの小さな船ではとても漁にはでられない。諦めて家に帰ろうとしたところが、浜にサザエ工が転がっているのを見つけ、拾ってみるとまだ子供だったので、海へ返してやった。やがて春が来て、海も穏やかになったので、太助どんは小舟で海に漕ぎ出した。すると、山の方から大風が吹いてきて、太助どんの小舟をみるみる沖へ運んでいく。漕いでも漕いでも、少しも浜に近づかない。すると黒い雲が空を覆い、大シケとなった。荒波が舟の底にぶつかって、壊れると思ったそのとき、船がビタリと止まった。おや、と思ってあたりを見渡すと、波は高くうねっている。ただ、太助どんの舟の周りだけは静かだった。舟は、緑色にキラキラ輝く岩の島に乗っていた。不思議に思っていると、岩が眩しく光輝き、女神が姿を表した。そして、言うことには「わたしは弁天岩の殿島神社に祀られている市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）。お前が助けたこの子（サザエ）のたのみでお前を助けてしんげよう」と言って姿を消した。やがて風は収まり、海が凪いだ。雲が晴れ、太陽が顔出した。すると岩は沈んで船は再び海に浮かんだ。太助どんは船を漕ぎ、浜へ向かった。岸に近づくとき砂浜がキラキラと宝石のように輝いている。その美しいこと。それから太助どんは漁に出かける前には、必ず弁天岩にお参りをしてから船をだすようになったという。	
富山県魚津市	錨の溝
<あらすじ> かつて有磯海（ありそうみ）と言われた富山湾の海底には深い谷が刻まれ、どこまで続くのかわからないほど深い。この海底の谷には杉林（埋没林）があり、主が棲んでいるという。ある日、獵師の定置網に角の生えた小さな海蛇がかかった。獵師達はこの珍しい海蛇を面白がってからかい、こんなもちは食えないと言って海へ放り投げた。すると突然強風が吹き荒れ、船が暴れ出した。船は錨鎖（びょうさ）に振り回されて今にも沈みそうになった。すると水煙が上がり竜神が姿を表した。我が子を笑い物にしたと言い、カンカンに怒っている。さっきの海蛇は竜神の子供だったのだ。獵師達が必死に謝ると、錨の鎖が切れて、錨は深い海の底に沈み、船は静まった、獵師達がほっと胸をなで下ろすと、沖に幻想的な蜃気楼が見えた。人々は、この港を錨の龍が住む「錨の溝」と呼ぶようになった。 魚津は江戸時代以来、越中東部の中心地として栄えていた。ここに彦左衛門という金持ちがいた。ある日、彦左衛門の元を若侍が訪ねてきた。侍は「実は自分は錨の溝の主の皇子だ」という。彦左衛門は驚いた。錨の溝の主の若君は「黒部川流域の愛本の主の娘と結婚することになったので、祝いに使う道具を貸してほしい」と言った。彦左衛門は黒部川の主を怒らせたら 村々が水没する恐ろしい洪水が起きてしまう。これは大変だと思い、見事な魚津漆器の婚礼の道具を一式貸すことにした。しばらく経った頃、錨の溝の主の使いが道具を返しに来了。しかし、器をよく見ると、米が 3 粒残っていた。庄屋は汚れたままにすれば道具が傷んでしまうと言って、器をきれいに洗わせた。その夜、夢に溝の主が現れ「なぜ米を捨てた。尊い米を捨てた柄、お前たちはいつか米で苦労するだろう。だが、この海をいつまでも大切にすれば、海の恵みに困ることはないだろう、と	

愛媛県伊方町	速吸瀬戸の守神
<あらすじ> 速吸瀬戸に棲む生き物はみんな丸々と太り、味が良いから人間達はその魚を獲ろうと漁に出る。ところが、潮の流れが速く、命を落とすものが後を絶たない。実は、漁師たちを海に沈めるのは、悪い神の仕業だったので、海の神は怒ってその悪神を岩礁に封じ込めた。そして、その岩礁に人々がぶつからないよう、岩のてっぺんを金色に輝かせて目立つようにした。人間達はこの岩を黄金簪(おうごんばえ)と呼ぶようになった。人間が国と国を往来し、交易を行う時代になった。大きな船がこの関を行き交うようになると、大陸から来る宝を積んだ船を海賊達が襲うようになった。欲深い海賊たちは黄金簪の輝く目印をも手に入れようと奪い合った。黄金簪の目印が無くなると、多くの船が黄金簪にぶつかって沈むようになってしまった。 困った神様は、タコの夫婦にこの海域を守ってほしいと頼んだ。そして、海峡の西（豊後）と東（伊予）の底で、それぞれ剣を持ったタコの夫と、玉を持ったタコの妻が、番人のように海峡を守ることになった。おかげで海は平和になった。ある時、佐田岬に潜り、ウニや貝を獲っていた男が、海底で光る物を見つけた。潜ってみると、そこにはタコがいた。タコは、神様に仰せつかって船を守ることにしたので、対岸にいる夫に会うことができない、と言って泣いた。これを聞いた男は、人間がタコが持っている玉を神社で祀ると申し出た。佐賀関でも剣を神社に祀ることになった。こうしてタコの夫婦は再び会うことができるようになった。今も速吸瀬戸にいるタコは、このタコ神様たちの子孫だ。だからこの辺りの人々はタコを食べないのだという。	
和歌山県串本町	お屋敷になったクジラ
<あらすじ> 江戸時代、紀州藩は鯨漁を行った。捕ったクジラは隅から隅まで無駄なく利用され、最後に残った骨まで大切に使われた。沖に鯨が姿を見せると、人々は海へ出て、追い込み漁を行った。やがて、串本の大島は廻船の寄港地となり、この地で商いをする商人達は大いに潤った。ところが江戸時代も終わりに近づいた頃、大地震が起こり津波に襲われた。そのころは、鯨もめったに姿を見せなくなっていた。村はかつてない大飢饉に見舞われ、人々は飢えに苦しんでいた。そこに、廻船が一隻到着する。すると、江戸へ向かうはずのその船から、積荷が下ろされ、米や味噌、醤油までもが、飢えで苦しんでいる人々に配られた。人々は、これで生きのびられるとありがたがった。ある時、珍しく鯨が姿を表した。人々は喜び、網を持って海へ出た。ところが追い込んでみると、鯨はいつの間にか大きな杉の流木に変わってしまった。どうしたものかと困っていると、そこに商人が現れて、流木を5両で譲ってほしいと言う。すると、欲ばりな若者は、町へ運べば20両で売れるだろうと言い、値を吊り上げようとした。それを聞いた親方が怒り出した。「お前たちは知らんが、津波と飢饉で苦しんだ時、船から荷をおろして貧しい者に施してくれたものこの方じゃ」といった。みんなは驚き、その流木を商人に渡すことにした。普段から、クジラを隅々まで無駄にしないのが当たり前のこの地の人々は、流木を丁寧に塩抜きして、その木を無駄なく使い切り、今も残る「稲村亭」を建てたのだという。	
島根県松江市美保関町	えびすさま と にわとり
<あらすじ> 物語の舞台は、島根県の最東端の港町「美保関（みほのせき）」。日本海や美保湾、そして中海に囲まれ、季節ごとの美味しいお魚がいっぱい獲れて、漁師さんたちは「えびすさまのおかげ」といっては、毎日毎日、美保神社（えびすさま）へのお参りを欠かしませんでした。そのおかげで美保関は平和な町として、みんな仲良く暮らしていました。 そんなえびすさまですが、毎日夜になると、中海という大きな湖の対岸にある揖屋（いや）へ船で向かい、揖屋神社にすむ美しい姫神さまに会いに行っていました。朝には美保神社へお勤めに戻らなければならないため、にわとり「朝になったら一番に鳴いて報せておくれ。」とお願いをし、毎夜毎夜、揖屋へお出かけになっていたそうです。 そんなある日、そのにわとりが時を間違えて、夜中に「コケコッコー！」と勢いよく鳴いてしまいました。えびすさまは驚いて、急いで帰り支度をして、美保関に向かいました。あまりに慌てていたため、その際、船をこぐ櫓（ろ）を落としてしまいました。仕方なく足で船をこいでいると、「フカ（さめ）」がえびすさまの足をバクッ！！・・・えびすさまは足をおげがなされましたが、なんとか無事に美保関へ戻ってこられました。 その後、大好きなえびすさまが、おげがされたこととそのわけを知ったまちの漁師さんたちは、えびすさまにこのように誓いました。 「えびすさまをかんだフカはわれわれ漁師が退治します。それにしても、時を間違えたにわとりも悪い！だから、今後一切、にわとりとにわとりのたまごは食べません。」 そして、それ以来、美保関のひとびとは、にわとりもにわとりの卵も食べなくなり、今もその約束を守っているそうです。	